

平成二十年度行事日程決定

去る3月2日に総会が開催され、左記の通り平成二十年度の行事日程が決まりました。

5月25日(日)	例会
7月27日(日)	例会
9月22日(月)	
10月23日(祝)	研修親睦旅行
11月15日(土)	報恩講
12月31日(水)	竹灯籠除夜会
1月25日(日)	例会
3月1日(日)	役員会・総会

*なお、例会は午後7時からですが、冬の1月例会に限り、午後5時から始めます。

~~~~~

「ありがとうございます」 「おかげさま」  
「すみません」 「もったいない」

人間浄土の法悦(よろこび)の  
賛歌なり。

「ばかりしい」 「つまらない」  
「これくらい」  
これー人間地獄の苦悩の  
呻吟(うめきごえ)なり。

寺川幽響先生

## 仏教用語の解説⑦

前回まで、仏教ではとても大切な言葉なのに、全くまちがった意味で使われているいくつかの言葉について、本来の意味を解説しながら紹介してきました。

今回からは、仏教での読み方とちがう読み方で一般的に使われている言葉について、本来の意味を紹介しながら、いくつか紹介していきます。

### 《上品・下品》

一般：じょうひん・げひん  
仏教：じょうぼん・げぼん

「上品・下品」は一般的には、「じょうひん・げひん」と読み、上品は、「品格がいやしくなく、気品があるさま」を意味し、反対に下品は、「いやしく、品のよくないさま」を意味します。  
これを仏教では「じょうぼん・げぼん」と読み、阿弥陀様のお浄土への往生を願う者が、修行の程度によって、大きく上品・中品・下品の3つに分類されることを言います。  
生前ならかの善業を積んだ凡夫は、上品・中品に往生するのに対して、善を修せず悪をなした者は下品に生ずるといいます。

このことが転じて、上品は「上等、下級」を意味し、下品は「下等、下級」を意味する一般用語となり、さらに「じょうひん・げひん」と読んで、「品がよい、品が悪い」と使われるようになったようです。

### ○阿弥陀様の願い

とは、浄土三部経の一つ「観無量寿経」に説かれているのですが、これをさらに三分類して九種類に定められています。  
その中の最下位が「下品下生」と呼ばれる全く救われようのない位なのですが、人ごとではありません。その「下品下生」こそがこの私のことです。  
善業を積むどころか悪業煩惱に惑い、往生のすべを全く持たないこの私であると示されるのです。  
けれど同時に、だからこそ全ての者を救わずにはおられないとの阿弥陀様のご本願があるのだと説かれていくのです。  
つまり、阿弥陀様の救いの目当ては、まさに「下品下生」のこの私にあり、阿弥陀様の願いの中に居る私であることを改めて悦びたいものです。が、娑婆世界では、少しでも「上品(じょうひん)」でありたいものです。

# 題材法話

\*前号からのつづき

阿弥陀様の二度と放さないとの「摂取」の誓いは、いつでも私達を照らし続けて下さっています。

○よろこべない私

そんな阿弥陀様の存在に気が付いたならば、本当は胸の中が晴れ晴れとした心持ちになってもおかしくないはずで

す。ところが、そうは問屋が

おろさないのです。ホームで抱きかかえられ

た子供が、よろこび反省する

ところか、まだ逃げよう

と、晴れ晴れとしたよろこ

びの心も起こらず、いつもの

の生活を繰り返しているの

です。この悲しい私たちの現

を、次の三句で「私達はす



常に信心の空を覆い、どう  
しても心からそのことを喜  
べる状態にはありません」  
憎之雲霧 常覆真実信心天  
と詠われてます。このことを私  
達はどうのように受け止めれ  
ばよいのでしょうか？

○親鸞様の告白

歎異抄という有名な書物  
があり、この歎異抄は、あまりに  
も親鸞聖人が端的な表現で  
語っておられるため、誤解  
されやすいことでも有名な  
のです。それが、お念仏

の本質に迫っているという

ことでもあります。喜

ぶべき事を喜べない「こと

について、端的に述べて

おられます。ある時、弟子の唯円坊が

親鸞さまに尋ねます。一私はお念仏を申しても、

躍り上がって喜ぶほどの心

も湧きませんし、また、早

く浄土へ行きたいとい



のすがらと。その唯円坊の問いに対し  
て、私もそう思っていたんで  
すよ。唯円坊もおなじ思  
いでしたか」と、まずお答え  
になりました。続いて親鸞様は、  
「よくよく考えてみるに、  
本当は天におどろ地におど  
るほどに、よろこばなければ  
ならないのは、煩悩のためであ  
り、また浄土へ早く行きた  
いと思ふところが、少くも死  
ぬことでは、煩悩のせいなの  
です。けれども、このことを、  
仏様はとくに分かっていて、  
て、私達を「煩惱具足の凡  
夫」と呼んで、「煩惱具足の凡  
達のため、他力の本願があら  
るんだぞ」と仰っておられ  
る。ではありませんか」

「そう考えると、仏様の仰

っている通りだから、仏様の仰

ぱり阿弥陀様の本願は間違

いなく、よけい頼も

く感じてくるのです」

「もしもこれに悦び

が湧き、いそいで浄

土へ行きたいと思う

が湧き、いそいで浄

土へ行きたいと思う

が湧き、いそいで浄

土へ行きたいと思う

が湧き、いそいで浄



ようなら、かえって自分に  
は煩惱が無いのではと、む  
しろ心配になるのではない  
でしょうか」と。  
で、煩惱によつて、晴れ晴れ  
とお念仏を悦ぶ身にはなれ  
ないけれども、だからこそ  
阿弥陀御本願による「摂取」  
の救いが間違いないのだと  
いうことを、親鸞様が私達  
と同じ目線で語って下さい  
ます。

魅力あふれる人間親鸞の

告白です。今回の締め

くくりの最後の2句です。

○下に聞なき

「譬如日光覆雲霧 雲霧

之下明無闇」 譬えば、太

陽の光が雲や霧で覆われた

としても、その下がけつし

て闇になるようなことがな

いように、私達が煩惱の雲

や霧で覆われていても、阿

弥陀様の救いの光は必ず届

うことであります。今回の6句も大変  
味わい深いものでした。



1月例会 住職法話より